
晴れた日はベランダで

愁しゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

晴れた日はベランダで

【Nコード】

N2315E

【作者名】

愁しゆう

【あらすじ】

オレ、橋谷綱紀には晴れた日に早起きする理由がある。オレんちの近くの家のベランダに晴れた日限定！で姿を現す『彼女』の姿を拝むコト。ある日曜日、『彼女』の家の前で、『彼女』とそっくりの無愛想な男とぶつかって…！？

プロローグ（前書き）

B.L.というには、あまりにもゆる〜くぬる〜い作品ですが、男の心のいちやいちやが苦手な方は避けてくださいませ。

ブローグ

ジリリリン！

黒電話のけたたましい音とともに、オレ：橋谷綱紀はしたにこうきはガバツと飛び起きて、まだ鳴り響くケータイの目覚ましを止めた。

勢いよくカーテンを開けると、朝日のまぶしさに目がチカチカする。

昨日の天気予報がバツチリの中！本日は快晴なり。

Tシャツとハーフパンツをポイッポイッとベッドに放り投げて、制服のズボンを着きシャツを羽織ってその上にブローグを引っ掛ける。

おっと、ネクタイネクタイ…。

シャツのボタンを留めながら、バタバタと階段を駆け降りた。

そのまま洗面所に直行して、鏡の中の自分に啞然。

「うはー、なんだって今日に限ってこんなに寝癖が…っ」

いつもは制服を着る前に洗顔や歯磨きをして、寝ぐせは豪快に髪を濡らして直すところだけど、今日はなにしろ急いである。実際に猫の手が借りられるなら借りてしまいたいほど急いでいる。

歯ブラシを口に銜えつつ、姉貴の寝ぐせ直しスプレーをちよっと拝借。

ああ、フローラルな香り…クラスのヤツに馬鹿にされそうだな。

「ちよっと！ブローグに歯磨き粉つけないでよ。落とすの大変なんだから！」

お袋がお玉片手に覗いてきたので、

「わはっへうっへ！（わかってるって）」

と返事をしたところ、付いたじゃねえかよっ！ここでまたタイムロス…。

紺色のブレザーに白いシミは目立つ。中学の学ランも目立っただけだ。

どうして制服は濃い色が多いんだ？白だったらついても目立たないのにさ。

歯磨きが終わると濡れタオルでゴシゴシと顔を洗って終了！

え？洗顔フォームは使わないのかって？そりゃあ普段は使ってるけど、そんなことしてたらまた白いシミがつくдар。

人間、一日くらいまともに顔を洗わなくても死なないから！

「弁当できてる！？」

「本当にあんたは、晴れた日も雨の日も慌ただしいんだから」

玄関で靴を履きながら叫ぶと、お袋は呆れながらスクールバッグを渡してくれた。

バッグの中には朝食用と昼食用の二つの弁当箱が入っている。

晴れた日の朝食は、学校に着いてから食べることにしているんだ。結構な重量だけど、昼まで何も食わないでいられるわけがないし。

「いつてきまーっす」

ケンケンと片方の靴を履きながら家を出た。

第一週：早起きは三文の得？（前書き）

第一週とありますが、暦の上のことではありません…。

第一週：早起きは三文の得？

いつもはお袋に起こされるまで情眠を貪っているオレだけど、天氣の良い日は別だ。

天氣の良い日の朝にはイイコトがある。早起きは三文の徳っていうけど、オレには三文以上の得がある。え？徳違い？んなコト気にすんなくて！

でなきゃ、いつもより三十分も早く起きたりしないだろ？

オレの家があるこの一帯は、いわゆる新興住宅地というヤツで、新しい家ばかりが軒を連ねている。うちも引越してきてまだ三年くらいだ。

まだ土地だけの場所も多い近所に、最近建った家がある。

駅に向かう道すがらにあるその家は、白いレンガの壁に赤い三角屋根の、童話に出てきそうなちよつと可愛い外見だ。

その家の二階のベランダに、オレが早起きする理由がある。いた！

ベランダには、じょうろ片手にプランターや植木鉢に水をやるひとがいた。

ふわふわと少し癖のある、栗色の柔らかそうな髪を後ろで纏めて、やさしい微笑みを浮かべて花に水をやっている。

まるで、花と会話でもしているような穏やかな表情だ。

着ている洋服はいつも白のタートルネックの長袖。同じようなものを何枚も持っているのか、たまたま見かける日と同じものを着ている日なのかは判らないけど、真っ白な服は彼女にとってもよく似合っていた。

歳はオレより少し上くらいかな。可愛いひとだと思う。というか、一目惚れ？（なんつって）

初めてその姿を目撃してから、毎日その家を見上げていたけど、毎日彼女を見られるわけじゃなかった。

三ヶ月観察して気付いたことは、彼女は朝七時…しかも、晴れた日にしか現れないんだ。

日直がなかったら、気付かなかっただろう。立ち止まってもやりとベランダを見上げる。

他の人からみれば不審者扱いされそうだけど、人通りはまだない通学にも通勤にも早い時間だし駅にも近いから、この近所のラッシュはあと三十分後くらいかな。

『可愛いなあ』

彼女に見惚れていると、花を見つめていた彼女の視線が動いた。あ。

なんと！目が合ってしまった。

…いや、これだけ見つめていて気が付かないほうがおかしいだろうと思うかもだけど、彼女に出会って三ヶ月、こんなことは初めてだ。

文字通り固まってしまったオレに、彼女は花に向ける微笑みを向けてペコリと会釈をしてくれた。

オレも慌てて会釈をすると、彼女はもう一度髪が揺れる程度にお辞儀をしてスツと家の中へ戻ってしまう。

…決して嫌われたワケじゃないぞ。もともと、数分しかベランダにいないだけなんだ。

こうして、晴れた日の朝限定『突撃！』となりのベランダさん（隣じゃないし）は終了した。

「おまえさあ…食べるかばーつとするか、どっちかにしろよ」

すすき鈴木千加が中指でメガネのフレームを押し上げながら、呆れた声で溜息をついた。

オレの手には箸が握られているが、残念ながら箸はその機能をはたしていない。

晴れた日のオレはいつもこんな調子だ。

特に！今日は彼女と目が合ったんだ、平気でいられるハズがない。

「だってさ、オレを見てニコツと笑ったんだぜ？もうっ！堪らん！」
「…はいはい、頼むから飯粒を飛ばさんでくれ」

オレの魂の叫びに千加は顔を顰めて、周囲に飛び散った御飯粒をティッシュで取っていく。

「ほら、こんなトコにもつけて」

「ん」

ほら、と頬に付いた御飯粒を取って、オレの口に指を突っ込む。
ん？いま一部の女子から『キャーッ』って悲鳴が聞こえたような？
悪かったな、男同士で気色悪くて。でも、ガキン頃から千加はオカン体質なんだからしょうがないだろ。

…一度『千加ってお袋みたいだ』って言ったら、しこたま殴られた。

見た目は千加が聞いたら半殺し間違いない！が、とても同じ性とは思えない美少女…いやいや美人さんで優等生を絵に描いたようなヤツなんだけど、割と凶暴なんだよ。手なんか女子みたいに白くて細いの、ありえないくらい馬鹿力なんだ。

千加とは幼なじみで、オレが三年前に引越して家が離れても、こうして腐れ縁は続いている。

「でも、おかしい話だよな。晴れた日しか花に水をやらないだなんて」

「晴れた日は光合成をするから、水の力が必要なんじゃないのか？」
間違いない、と人差し指を立てて言うと、千加に丸めた教科書でポカッと頭を殴られた。

おおっ、その教科書は生物じゃないか！なんとタイムリーな。

「…じゃあ、おまえは曇ったら飯を食わないのか？」

「いや、そんなことはないけど…。だったら、千加はどう思ってるんだ？」

聞き返すと、千加はうーんと首を傾げて、丸めた教科書で自分の肩をポンポンと叩く。なにかを考えてるときの癖だ。

…千加がそういう風に首を傾げると、肩につく長さの髪がさらさ

らと揺れて、なんとも色っぽ…いやいや、断じてそんな意味ではなく！

「さてね。体が弱くて晴れた日しか出られないとか」

「ええっ！？ 儂げなひとだと思ったけど、そんな事情が…っ」

「…アホらし」

ガーンと頭を抱えるオレを尻目に、千加は盛大な溜息をついて自分の席へ戻って行った。

第二週：黒い彼女？

「…なんだって、こんな日に外に出なきゃなんないんだ」

ブツブツ文句をたれながら、オレは傘を広げた。

今日は日曜日で、オレの嫌いな雨降りだ。

人使いの荒いお袋に、醤油一本のためだけに！ようやくセーブポイントまでたどり着いたゲームを、まだセーブをとる前に！ゲーム機のコンセントを引き抜かれて家から追い出された。

…居間のテレビは親父に占領されてるから、オレの部屋のテレビで韓流ドラマを見ようと思ったんだろう。

それにしても、あんまりな仕打ちじゃないか？

オレの二時間を返してくれっ！

「はあ…、こんな雨降りじゃ彼女にも会えないし」

そもそも朝でもないから、可能性は限りなくゼロに近いんだけどさ。

何度目かの溜息をついたところで、彼女の家の前まできた。

出て来ないことは判っているが、それは純な男心というヤツで、つい期待してベランダを見上げてしまう。

やはりベランダには人影がない。

花たちもなんとなく元気がないように思うのは、オレの被害妄想か…って、そんな大袈裟な。

ドンッ

我に返った時には、オレは雨に濡れた地面に尻餅をついていた。

うわっ、ビショビショだよ！

どうしてこんなことに、と見上げると、眉間に皺を寄せて不機嫌そうに細められた瞳と目が合った。

「邪魔だ」

唸るような低い声に、オレは慌てて後ろに退いた。

パシャンと音を立てて傘が落ちる。

そんなオレにもう一瞥くを見ると、彼は長い足で駅の方へ歩いて行った。

黒いタートルシャツに黒いジーンズと全身真っ黒で、持った傘まで黒かった。

けれど、声が出せず咄嗟に立ち上がることもできなかったのは、いまいた『彼』が『彼女』にそっくりだったからだ。

『彼』は黒で、『彼女』は白。

『彼女』はやわらかそうな髪をひとつに結っているけど、『彼はブラシもいれていなさそうなボサボサ髪を放置している。

この家から出てきたということは、この家のひとだ…というか、ここまでそっくりなんだから、きっと兄弟なんだろうな。

…雰囲気はまったく似てないけど。

それにしたってさ、玄関先にぼーっと突っ立ってたのは悪かったけど、もう少し言いようがあったんじゃないか？

可愛さ余って憎さ百倍…いや、あいつ（で充分！）と彼女は別人なんだ。

「あー、クソっ！ツいてねえ…」

…戻って着替えるのも面倒だし、電車に乗るでもなし、まあいつか、このままで…。

オレは盛大な溜息をついて立ち上がると、雨と泥で汚れた手をジーンズで拭って（けど、ジーンズも泥まみれだから意味ナシ）傘を拾った。

第三週：再会は突然に

駅前のスーパーで醤油とポテチと緑茶のペットを買って、帰りにその近くのゲーセンに寄った。

家を出てからまだ一時間経ってないから、いま戻ってもテレビはまだ母上が占領中だろうし。

小遣いが余ってヒマなときは、大体ココに来て対戦格ゲーを负けるまでやっている。

自慢じゃあないが、オレサマ結構強いんだぜ？ふふふ…。

しかし、いつも同じ相手に負けるんだ。キャラはオレと同じのを使っているんだけど、どうにも相手のほうが一枚上手だ。

プレイヤーの名前はJYO。ちなみにオレはKOU。

くうう！カッコイイぜ、JYO！兄貴と呼ばせてくれ！

しかし、このゲーセンの対戦台は、壁一枚を間に挟んでいるから、すぐには相手の姿を見ることはできない。

試合が終わって向こう側の台を覗くころには、JYOの姿はいつも消えているから、いまだにJYOがどんなひとなのか知らないんだ。

さて、今日は来てるかな？

あー、残念ながらオレの定位置はほかのヤツが座っている。ってあれは…。

「千加じゃん」

オレが声をかけても千加は対戦の真っ最中で、返事をする余裕もないらしかった。

ディスプレイを覗くと、相手はJYOではなかった。

うはあ、ボロボロ…。

千加もある程度は強いんだけど、いまはボロ負け中。もうそろそろ終わり…って、ああ負けた…。

「ああっ、クソ！」

千加は学校では決して使わない罵声をディスプレイに吐いて、バンツと台を叩く。

周囲のひとが何事かとこちらをチラチラと窺っている。

「どうしたんだよ？おまえらしくもない」

椅子に座りなおした千加は、やっといつもの冷静さを取り戻した表情でオレを見上げる。

「いや、怒ってる。かなり。」

「どうしたもこうしたも…相手の奴、複数でやっていやがる」

このゲーセンはケンカ防止のため、一つのプレイヤー名につき一人でしかプレイしてはいけないというルールがある。

けれど、いま千加が対戦していた相手は一つのプレイヤー名で何人かが交代でやっているというのだ。

たかがゲームと言うなかれ。ゲームにとって、対戦成績は重要なんだ。しかもランキングが出るし。

ズルした相手に負けて、それが一敗と記録に残るのは本当にムカつく。

しかも千加はいま、一敗差でランクの順位が変動する微妙な位置にいるんだ。

このプレイヤーの名前は千加のすぐ下の順位のヤツだ。だからなお頭にきてるんだろう。

「…まだ対戦を申し込んできていやがる」

千加はメガネのフレームを押し上げながら、忌々しげにチツと舌打ちした。

やめればいいんだけど、このままで引き下がるような千加じゃない。

けどなあ、いまの相手じゃ千加は勝てないだろうし…そうだ。

「じゃあさ、こっちも仕返ししてやろうぜ」

「はあ？」

「このキャラは使い慣れてねえけど、なんとかなるだろうから」

自慢じゃあないが（二回目）、オレサマはランキング二位の実力

者だ。

「けど、これはおれのケンカだし」

オレの提案に、千加はきゅっと唇を噛む。

プライド高いんだよなあ、千加は。

どうしようかと悩んでいると、いきなり肩を掴まれてグイッと後ろに引つ張られた。

「うわあっ」

引かれた勢いそのままに、よろめいて床に尻餅をついてしまった。またかよ！せっかく乾いたジーンズがまた濡れたじゃねえかつ！突然現れた黒影は、椅子に座った千加も退かせてそのまま対戦を始めた。

「…おまえは…」

黒影の正体は、『彼女』の家から出てきた男だった。

文句も言えないままおよそ五分。

ズルした対戦相手はようやく降参したようだ。

そう。『彼』は強かった。兄貴と呼ぶに相応しい実力者だった。

ものの数秒でKOを取ること数試合。なにしろ瞬きしてる間に試合が終わってしまうんだから、キメ技すら判らない状態だ。

千加と二人揃ってポカンと口を開けて呆けていたんだけど、『彼』が立ち上がるのに我に返って咄嗟にその腕を掴んだ。

「…なんだ」

低い声色と邪魔をするなど言わんばかりの表情に、反射的に体が竦んでしまう。

負けるなオレ！相手は同じ人間だ！兄貴なんだ（違う）！

「なんでこんなこと…」

ももごと口に出すオレを、『彼』は少し跳ねた前髪を長い指で掻き上げながら、フンと鼻で笑い飛ばした。

「ただ、俺がいつも使っている席からくだらない連中を追い出したまでだ」

いつも使っている席って！？

やっぱり彼がJYOなのか？兄貴なのか？（違っ^てば）！？

「あんた、もしかして…JY…」

オレの問いは、突然乱入してきた乱暴な複数の足音によって遮られた。

第四週：ゲーセンでリアル格ゲー！？

ドカドカと迷惑極まりない音と共に現れたのは、見るからにガラの悪そうな三人の男達だった。

「おまえらインチキしやがったな！？」

いきなり胸倉を掴んできそうな勢いだけど、残念！椅子にはまた千加が座り直してる。

って、もともとインチキしてたのはそっちじゃないか！…とは、小市民のオレには面と向かって言えません…。

ああつ、『彼』なんてガン無視で向こうの台に行こうとしてるし！そんなに対戦したいのかよっ！？

「なんだおまえ、なに勝手に逃げる気にいるんだ」

…案の定捕まってるし。

しかし、『彼』は相手が誰であろうと関係ないようだ。
バキッ

彼は肩に手をかけた男を、振り上げた拳で容赦なく殴り飛ばした。身長こそ彼には及ばないが、体格は彼の1.5倍はある男は、ガコツと派手な音を立てて、対戦台に体当たりした。

うはあつ、これは痛い！

でもそれはヤバイって…。

「！ てめえ、なにしゃがる！」

「汚い手で俺に触るからだ」

吐き捨てるような彼の言葉に、男達の顔がみるみる真っ赤に染まる。

ここまでくると、アツパレな正直者だ。

…願わくば、周囲の状況を考慮してもらいたいところだけど。

「この野郎！何様のつもりだ！？」

乱暴に胸倉を掴まれても、彼の表情は変わらない、というかさらに深く眉間に皺が刻まれる。

すでにオレ的には男達よりも彼のほうがずっと怖い。なにをするか判らないという意味も含めて。

「ぐはっ」

次の瞬間、彼の胸倉を掴んでいた男がその場に屑折れた。

展開が早すぎてなにが起こったのかオレには判らなかつたけど、男が腹を押さえているのを見るかぎり、どうやら彼の拳が一撃入ったのだろう。

「俺様だ」

彼はそう言つと、止めに床に蹲る男を爪先で蹴り上げた。

「！？ なにしゃがる！」

そのセリフ、二回目だぜ！…それはともかく。

呆気なく仲間をやられて一瞬惚けていた他のヤツらは、ほぼ同時に立ち直ると、一斉に彼に向かっていく。

彼は忌々しそくに舌打ちすると、すぐ側にある椅子を片手で持ち上げた。

すげえ、力持ち…って、感心してる場合じゃないし！

さすがに騒ぎを聞き付けた店員が向かってきてるから、これじゃこつちまで補導されるっ！

やめてくれっ、オレは皆勤賞を狙っているんだ！三年間皆勤したら高級万年筆セットがもらえるんだよ。高級だぜ高級！カッコイイ響きだ。

「！？ なに…」

「逃げるのも勝ちって言っただろ！！」

抗議の声を上げる彼の腕を力いっぱい握って、オレたちはその場からトンズラこいたのだった。

第五週：兄貴って呼んでもいいですか？

ゲーセンから彼の腕を引っ張って全力疾走したオレは、公園にたどり着くなりベンチに傾れ込んだ。

この公園はオレの家のすぐ側で、雨が降っているいまは遊ぶ子供もいない。

…そう、雨が降ってるんだよ。だからベンチも濡れてるワケで…いや、もうなにも考えまい。

「マジ疲れた…」

もうすでにびしょ濡れだから意味がない気がするけど、傘で辛うじて顔には雨が当たらない。

「うあっ！冷たっ！」

何の気なしに傘の骨組みを見ていたら、いきなり冷たいモノを額に当てられて、反射的に体が跳ね上がった。

見上げると、『彼』がコーラを差し出している。

…くれるのか？

「アリガトウゴザイマス…」

なぜかカタコトになっちまったよ…。

オレが起き上がると、彼はオレの隣に座った。

…ベンチ、濡れてるんだけど。気にしてない、か？

「…ところで」

「うえ！？はい！」

心の準備が整う前に話しかけられたもんだから、声が裏返ったじやないか…恥っ！

「あんたのダチ、置いてきたが、よかったのか」

「あ」

…よくねえよ…。

脳裏に般若の形相になった千加の姿が浮かんた。

ヤバイ…ヤバイよ…。明日、きっと雨だ。血の雨が降る…。

「あ、うん。はは…あいつなら大丈夫。優等生だから」

得意の猫かぶりで涙の演技をしているだろう姿を、その場で見たように想像できる。

もし千加が百パー悪くても、完璧な被害者に成りすます。千加の涙に勝てるヤツを、オレはまだ見たことがない。

だがしかし、置きざりにしたオレを千加は赦さないだろうなあ…
(遠い目)。

「イタダキマス」

顔と首で傘を押さえた不自然な体勢で、プシュツとプルタブを開けてゴクゴクとコーラを飲む。

冷たい炭酸の刺激に、思いのほか喉が渴いていたのを知り、ぷはつと息を吐いた。

「…助かった」

「え？」

息を吐き出すのと同時に呟くように言われて、つい聞き返してしまった。

彼は手の中にあるホットのブラックコーヒーを軽く握る。

するとなんと！スチール缶のソレはベコツと簡単にへこんだ。

馬鹿力なのは十分判りました。だから中身飛び出すからこれ以上はやめてくれ。

「天気の良い日は、どうにもイライラして。力の加減ができなくなる」

それを発散させるために、ゲーセンに入り浸っていると彼は言葉少なに説明してくれた。

どうにも、さっきまでの彼と様子が違う。いまの彼は落ち込んでいるような、自己嫌悪しているようなそんな表情をしている。

「あんたが連れ出してくれなきゃ、また大惨事を起こすところだった」

また？大惨事！？…訊きたいのは山々だけど、恐ろしそうだからやめとく。

それにすごく落ち込んでます、って雰囲気のひとつに思い出させるのもなんだし。

「まあ、いいんじゃない？オレもスカツとしたし。JYOに会えたい！兄貴って呼んでいいっすか！？」

オレの言葉に彼は鳩が豆鉄砲食らったような表情をして、すぐにゲラゲラと笑いだした。

…ヒトがせっつかく慰めてやろうとしたのに、そこまで笑いますか。

でも、彼が笑うと本当に『彼女』にそっくりで、不覚にもドキドキしてしまう。

「くくっ…、あんた面白いな。あーっと、KOU？だっけ？」

ヒーヒー腹抱えて笑いながら、涙までうつすら浮かべる彼は、実はそれほど悪くも怖くもないひとのようだ。

なんつか、躁と鬱の状態が激しいというのか…難しいコトはよく判んねえけど、ゲーセンの彼が別人なのかといまので気づいた。

「橋谷綱紀っす。兄貴、笑いすぎっす」

「くはっ、それやめてくれ…。俺は上條縁^{かみじょうゆかり}」

縁サン、ね。見た目キレイ系な彼には似合ってる。

ともあれ、どうやら完璧に笑いのツボにハマった彼を放って、残りのコーラを飲み干した。

…ところで、『彼女』のコトを訊いてもいいだろうか？

いいよな？この際、いろいろはつきりさせといたほうがスッキリするってもんだ！

「あの上條サン」

「あ？兄貴とか言っておいて、いまさら他人行儀かよ。縁でいい」いきなし話の腰を折られた。

これはやめとけという神サマのエライ訓示か？いいや、負けてなるものか。『彼女』とお知り合いになるいい切っ掛けになるかもじゃないか。

…なんか、すっごく緊張するんだけど。心臓バクバク…オレって

ば純・情っ！（アホ）

「じゃあ、縁サンにはお姉さまか妹さんがいらっしやったりなんか…」

途端に縁サンの表情が固くなった。

…もしかして、これは触れてはいけないことだったのか？

たとえば…賢くて可愛くて性格も良くての姉（妹）と、見た目そっくりなのにちょこつと不出来でちょい悪で捻くれてる自分をずつと比べられ続けて折り合いが悪いとか。

よもや家庭暴力なんてことはっ！

おおよ、と泣き崩れる『彼女』を踏みつけてる縁サンの構図を想像してしまい、自分の脳内創作のクセして血の気が下がった。

「…知ってどうするんだ？ 紹介でもしてほしい？」

「ぜひ！」

ついうっかり身を乗り出してしまったオレに、縁サンは盛大な溜息をついて持っていたコーヒーの缶をオレの頭に乘せた。

「やめとけ。綱紀のためにも聞かないほうがいい」

は？ という意味…？

オレが聞いたらショックを受けるってコト？ それはなにに對して？
もしかして…もしかして彼女は…っ

「縁サンのお母さま！」

瓜双子な母親というのも、世の中には多いと思う。

千加のお袋さんはそりゃあもう千加そっくりで、しかも皺ひとつない若々しさで、オレなんか『千鶴サン』って名前で呼ばせてもらってるくらいだ。

しかしあの可愛いひとが人妻かあ。なんだかイケナイ気分になつてしまいそうだ。

…いつも思ってたけど、本当にあんた、面白いヤツだな」

縁サンは苦笑すると、オレの頭に乗せたままのコーヒーを『やる』
と一言だけ言い捨てて帰ってしまった。

うーん、母親説は違うのか…。

そんなバカ丸出しで、ありがたい訓示を無視した罰はすぐに下された。

その日を境にして、ベランダに『彼女』が現れなくなったんだ。

第六週：真実はひとつ

「っはあゝあ」

オレはクセになつた大きな溜息をつきながら、机に突つ伏した。大好きな晴れの日なのに、オレの心は今日も雨模様だ。

なぜなら、もう二週間近く『彼女』の姿を拝んでいないからだ。ここんトコずっと快晴続きだというのに、『彼女』はいつもの時間に顔を出してくれない。

そういや、縁サンもゲーセンに来なくなつた。忙しいのかなあ。「いだだだだだっ」

ようやく引つ込んだタンコブの痕をグリグリされて、オレは涙を浮かべながら体を起こした。

「鬱陶しい。落ち込むなら、おれの行動範囲外でやってくれ」

「…千加。おまえ、悪魔だな…」

「この天使のように愛らしいおれをつかまえて悪魔とはなんだ」ええ、そうですね。オレ以外（断言）には天使さまですよ。

…天使がタンコブになるくらい殴るかっつーの。

縁サンと出会つたあの日、千加を置き去りにした罰は翌朝校舎裏にっこり笑顔で呼び出されて十分に受けた。

あのとき、オレは鬼神を見た。冗談じゃなく、マジに。

もちろんゲーセンの一件で千加にはなんのお咎めもナシ。上手いことやってくれたみたいで、オレも縁サンもあの件には関わっていないということになっている。

「縁サンとやらと知り合いになつたんなら、友達として家に行けばいいだろ」

しくしく泣きながら、ヒリヒリする後頭部をさするオレに、千加はメガネを押し上げながらの呆れ声で提案した。

「行つたさ。けどチャイムを鳴らしても誰も出ないんだ」

昨日、ゲーセンで遊んだ帰りに思い切つて寄つてみた。

だって、二人のうちどっちにも会わないなんておかしいだろ。

しかも、電気が点いていたのに誰も出てきてくれなかった。両親も不在なんだろうか。だったら電気は消していくんじゃないか？

「…まあ、なら綱紀に会いたくないんだろう。彼の話を鑑みるに、彼女に会わせたくないんだろうし」

「どうして会わせたくないんだよ？」

そこが判らないんだ。どうして縁サンはそんなにオレと『彼女』を会わせたくないんだ？

オレのためって、縁サンは言ったけど…。

『彼女』がオレの理想と違ったら可哀想だから？

そんなの、実際に会ってみなきゃ判らないっての。

「…綱紀さ、それってやつぱ天然？」

「どういう意味だよ」

「いや、又聞きのおれでも話の流れで真実に辿り着くんだけど」

「はああ！？それじゃ、その真実とやらを教えてくれよ！」

掴みかかったオレの手をやりわり（じゃなかった。骨がミシミシいう馬鹿力で）外しながら、千加はちよいちよいと人差し指で耳を寄せるように指示してきた。

そして…

「うつきゃあああ！」

「きゃあああああ！」

オレの甲高い絶叫と、女子のソレが重なった。

なんと、千加はオレの耳に唇を寄せると、フツと息を吹き込んだんだ！

うあ…ゾクゾクする…。

「相変わらず耳が弱いな」

身震いが止まらないオレを見て、千加はククツと意地悪く笑うもんだから思いつきり睨んでやった。

あ、有り得ねえ。なんつーコトをするんだ、こいつは…。

「なにがしたいんだよ、おまえは」

耳を押さえながらジト目で睨むオレに、千加はすっかりした顔ですつぱり言った。

「綱紀をいじりたいだけ。…まあ、真実はひとつだよ。おれから言えるのはそれだけかな」

…どっかの主人公ですか…。

とにもかくにも、ヒントは縁サンとの会話にあるらしいことだけは判った。

その夜、ゆずの香りがする湯船にゆったりと浸かりながら、オレは縁サンとの会話を思い返していた。

『彼女』の話を切り出すと、急に表情が変わった縁サン。

縁サンと『彼女』はそっくりで、『彼女』は母親ではない。

会うとシヨックを受けるだろうからと、縁サンはオレと『彼女』を会わせたくない。

…となると、やっぱり『彼女』がオレが思っているようなひとじゃないか、それとも縁サンが『彼女』だとしか…。

ん？縁サンと『彼女』が同一人物？まさかあ。男と女だぜ？いくらオレでも見間違えるなんてバカなコトあるわけ…。

…いつも思ってたけど、本当にアンタ、面白いヤツだな『

んん？『いつも』！？オレが縁サンと会ったのは、あのときが初めてだったっての！

ああ…そう思ってたのはオレだけだったってことね…。

オレが『彼女』の姿を思い浮かべるときには、いつもやさしい微笑みを浮かべている。逆に縁サンを思い浮かべるときには、どうしても眉間の皺と不機嫌な表情が出てくる。

それはオレのなかの二人の印象で、そしてそれは必ずしも真実ではない。

現に、腹を抱えて笑っていた縁サンにドキドキしたワケだし。

「…縁サンが『彼女』だったんだ」

そうだよな、あまりにきれいな笑顔で花とかも似合ってたから女

の子だと思っただけど、どっちかというと中性的な顔立ちだよな。

しかもこっちは下から二階を見上げてるワケだし、本当にしっかりとすべてが見えてたハズないじゃないか。

…なんつーか、ガツカリしたのは『彼女』へじゃなくて、気づいてあげられなかった自分にだ。

『天気の悪い日は、どうにもイライラして』

そう落ち込んでいた彼は、きっと『彼女』としての自分との間に挟まれて苦しんでいるんだ。

その傷を『彼女』と知り合いになれるかも、みたいな興味本位で挟ったのはオレ、だ…。

うわ…サイテー…。千加に天然とか言われて逆ギレしてる場合じゃないし。

「…縁サンに会いたいな」

会って、もう一度話したい。

『彼女』が縁サンだって判っても、オレはショックじゃなかったって伝えたい。

また縁サンと対戦したいよ。

だからさ、もう一度ベランダでも、ゲーセンでもいいから顔を出して。

第七週：早起きの日曜日に

そして七月を間近に控えた日曜日。

珍しく目覚まし時計が鳴る前に起きたオレは、勢いよくカーテンを開けた。

急に射しこんできた光が眩くて、目を瞬かせた。

天気予報では七月中旬の気温だと言っていた今日は、雲ひとつない快晴だ。

『彼女』に会いたくても、さすがに日曜日はどうしても起きられなかったけど、あの日以来日曜日も早起きをしている。

うーん！我ながら健康的だ！

居間に降りても、まだカーテンは閉じたまま。

お袋はきつと八時までは起きてこないし、親父はもうゴルフにでも行っているだろう。

昨日の帰りに買ったクリームパンを銜えながらカーテンを開けて、残りを口の中に押し込んで牛乳で流し込む。

着替え終わって壁の時計を見ると、時間は七時十五分前。

「ちよつと早いけど、まあ待つてればいいか」

我ながらプチストーカーっぽいけど、いまはそうするしかほかに方法がないんだからしょうがないだろ。

オレの家は日曜日はダラダラなカンジだけど、よそ様は違うようで、近所では親父さん方が洗車をしている。

比較的若い世帯が多いこの地区のひとたちは、人見知りが多いのかはたまた面倒なだけなのか、あいさつをしてもペコリと愛想だけの会釈しかない。

：イヤな世の中になったもんだ。え？ジジクサイって？だって、あいさつはコミュニケーションの基本だろ。

付き合いをする上で、笑顔とあいさつは一番大切なのだと、たしか小学校の担任が言ってた。

そうしていつもの道を歩いて行くと、視界に入ってきた姿に足が止まった。

「あ！」

ついっかかり大きな声を出してしまい、ベランダにいた人影がピタツと動きを止めた。

その手にはいつものじょうろがある。

ゆっくりと振り向いた『彼女』は、いつものやさしい微笑みで会釈をくれた。

違和感は感じない。ごく自然な表情だ。

そして『彼女』はゆっくりと身を翻す。

「縁サンだろっ!？」

オレは思わずその背中に叫んでいた。

オレを避けるように時間を変えてベランダに出ていたのだから、今日見つけたために、また時間を変えてしまいかもしれない。

捕まえるなら今日しかない。

「気付くの遅くてゴメン!ちゃんと謝りたいから出てきてよ!」

そう言っても、縁サンは振り向きもせずベランダから姿を消してしまった。

…やっぱダメかあ。もうオレの顔を見るのもイヤなのかな。

とにかく今日はもうダメだろう。今度はいつ出てきてくれるんだろうか。

もっと早い時間?もしかしたら、学校が始まる時間かもしれない。縁サンがオレを避けようとするなら、いくらでも方法がある。

「…そしたら、もう会えないじゃんか」

もう一度、誰もいなくなったベランダを見上げて踵を返した。すると、ガシャとドアが開く音が聞こえて、慌てて振り向いた。

「…懲りないヤツ」

ドアに凭れかかりながら嘆息混じりに言った縁サンの表情は、困惑に揺れていた。

第八週：きれいなお兄さんは好きですか？

毛足の長い絨毯の上で、緊張のあまり身じろぎもできずに硬直するオレに、縁サンは声を殺して笑っていた。

「別に取りつて食いやしねえから、楽にしるよ」

「え？あ、はい…」

縁サンは小さな丸テーブルにふたり分のウーロン茶の入ったグラスを置くと、オレの向かいに胡坐で座った。

いまの縁サンは『彼女』の姿：つまり、肩までの髪を軽く結って白いタートルネックのコットンシャツを着ている。

もう正体は縁サンだって判っているけど、ずっと懂れていたひとが目の前にいるんだぜ？緊張のひとつもするだろ。

ん？そういや、オレはJYOにも懂れてたよな。結局、同じひとだったんだ。これも運命ってヤツ？

「あつはつはつはっ！」

突然響いた笑い声に、いつのまにかひとりの世界に入っていたらしいオレは、現実の世界に引き戻された。

笑い声の主は、絨毯に転がって笑っている。

…なに、また笑い上戸発動かよ。まだなにも言っていないんですが。「なんつか、失礼ですよ…」

「だって、あは…ガチガチかと思えばニヤけたり百面相してるから、さ。面白くて」

オレの抗議に、縁サンはゴメンゴメン、と謝りながら起きあがった。

白かろーが、黒かろーが、やっぱり縁サンは縁サンってことですね…。

「で？ひとがせっかく、夢を壊さないようにしてやろうとしてたのに、のこのこやってきたのにはなにか理由でもあるわけ？」

テーブルに肘をついてじっとこっちを見つめる縁サンは、特別気

を悪くしているようにも見えなかった。

もしかすると、本当にオレが『彼女』に憧れていたのを察して、正体がバレないように避けてくれていただけなのかもしれない。

どう言ったらいいのか逡巡していると、急にグラツと視界が傾いた。

すぐ目の前に縁サンの顔がある。

薄く、細められた瞳がオレを見下ろしている。

…やっぱり可愛い、というかキレイ、だな。目も髪と一緒に明るい色で睫毛も長いし…って、あれ？

「…ナニシテルンデスカ」

「もじもじしてるから、やっぱり取って食われにきたのかと思って、ご希望を叶えてやろうかと」

…その場合、オレは縁サンを女性だと思っているワケですから、位置が逆なんじゃないかと。

それよりも…

「オレも縁サンも男だと思っんですけど」

「どうだろう。たしかめてみる？ 綱紀ならいいぜ、可愛いし」

ふわっと、縁サンのやわらかい髪が額に触れた。

ヤバイです。とてもいい香りがします。

キレイなお姉さん大好きです。この際、お兄さんでも構いません

！（オイ）

心臓が壊れそうな勢いでドクドクとはずんでいる。

ゆっくりと近づいてくる唇に、ぎゅっと目を瞑った。

第九週：ケモノとエモノ？

「ふっ!？」

唇が自分のぬくもりではないモノで濡れる感触に驚いて目を見開いた。

「ごちそうさま」

すでに体を起こしていた縁サンは、絨毯に仰向けで転がったまま目を睜るオレを見下ろして、見せつけるような緩慢な仕草で自分の唇を舐めた。

オレも一応お年頃な男で、少ないけど女子との交際経験もあるワケで。

つまり、相手が男だろうとキスひとつじゃここまで驚きません（よな?）。

舐めたんですよ!？このひと!ひとの唇をねつとりとひと舐め!ネコか!？イヌか!？…いえ、そんな可愛い舐め方じゃあ、ごさいませんでした。

…本気で骨まで食らう、肉食獣のような…。

なんかゾクゾクと鳥肌が立つんだけど、それは気持ち悪いとかそういうのじゃなくて…。

ダメだ、この先は考えたらヤバイ気がする。

ん?ヤバイってなにがだ…?

「早く起きないと、もっと食うぜ。なにしろ引きこもり生活で溜まりに溜まってんだから」

「はいっ!」

縁サンの言葉を最後まで聞く前に、体が本能的な危機を感じて起きあがっていた。

なにが溜まっているのかというのは、このキレイな顔のひとからは聞きたくありません…。

縁サンは可笑しそうに笑って、オレの言葉を待ってくれているよ

うだ。

… 大変に不本意ですが、緊張は解れました。

… 別の意味で心臓は飛び跳ねておりますが…。

オレはここへきた理由を思い出し、あらためて正座すると、

「本当にすいませんでした！」

ガバツつと床に這いつくばるように頭を下げた。

縁サンはオレの謝罪にぱちくりと瞬きをして、え？と首を傾げる。

ああ！なんて可愛い仕草… 萌え。

千加もこうすると可愛いんだよなあ。

「もしやオレつてば、『首傾げ仕草フェチ』？」

「いやいや、いまはそんなコト考えている場合じゃないつて。」

「あ、えと… 縁サンが白かったり黒かったりするのには理由があるハズなのに、オレはそれに気づかなくて… ベランダの『彼女』を紹介してくれなんて、能天気なコト言つて…」

自分でもなにを言っているのか判らない。

それでも縁サンはなるほど、といったふうに小さく頷いてくれた。

「綱紀の言葉を借りれば、いいんじゃない、んじゃないか？ 二重人格なのは俺も承知してるし。… 白と黒、か。言い得て妙だな」

縁サンは自分の着ているシャツを指で摘まんだ。

… 晴れた日と雨の日の服の違い、自分で自覚がなかったんだ…。

なぜかズキツと胸が痛んで、無意識に自分の胸元を掴んでいた。

「昔話、聞いてみるか？」

「… え？」

「聞いたら、責任とってもらっけど」

「はい！？」

縁サンは声が裏返ったオレに『嘘だつて』とキレイなウインクをして（つい見惚れてしまった）、溶けかかった氷が浮かぶウーロン茶を口に含んだ。

第十週：トラウマ

責任問題云々は別として、決して軽い話題ではないことが、縁サンの雰囲気で知れた。

「綱紀は俺のほかには、この家の住人に会ったことはあるか？」

「えっと…」

訊かれて改めて考えてみると、ないかもしれない。

近所のひとには、直接会ったことはないにしろ、出勤時とかゴミ出しとかそういう姿を見かけたことはある。

そういえば、この間縁サンの家を訪ねたときも、電気が点いているのにチャイムを鳴らしても誰も出てきてくれなかった。

…じゃあ、縁サンのご両親は…。

「いや、死んでないし。まず滅多に帰ってこないだけ」

オレの表情を読んだ縁サンがヒラヒラと手を振った。

それならどうして訊くのか、とのオレの表情の問いに、縁サンは記憶を掘り返すような少し遠くを見るような瞳で話し出した。

縁サンの両親は国際線のパイロットと客室乗務員をしていて、一年のほとんどを空の上と外国との往復で過ごしていた。

縁サンが幼い頃から忙しかった両親の代わりに、おばあさんが面倒を見てくれていたそうなんだけれど、縁サンが七歳のある雨の日、急におばあさんが倒れた。

人見知りの激しい（らしい）縁サンが必死に近所のひとに助けを求めて、救急車でおばあさんと一緒に病院に行った。

病院の待合室で無事を祈る縁サンに追い打ちをかけるように、テレビで飛行機の胴体着陸事故のニュースが流れたのだ。

「両親と一緒に乗った飛行機だったんだ。黒い雲で覆われた空に炎が舞う光景を見て、目の前が真っ暗になった」

そうしてもたらされたおばあさんの訃報に、自分はひとりになってしまったのだという絶望感が全身を支配した。

人間、あまりに恐ろしかったり哀しかったりすると泣けなくなるもんなんだ、と縁サンは肩を竦めて苦笑する。

二コースで流れた飛行機が炎上する場面の前に、両親は避難して無事だったが、検査入院などで帰国したのは、おばあさんの葬儀が一通り終わったあとだった。

両親の無事を知ることによってようやく安堵した縁サンは、箍が外れたように泣き続けたそうだけど、胸の奥と記憶に刻まれた恐怖はトラウマとなって残ってしまう。

「雨の日になると、なにかに追い立てられるような感覚が怖くて暴れてた。自分ではその理由を全く認識してなかった」

子供のころはその行動は物に当たるだけで留まっていたが、成長するにつれてその対象がひとへと移行していった。

理由もなくいじめはしない。それは彼の中にある善き部分が止めている。

だから、ワザと喧嘩を仕向けられるように仕掛けた。

「不良だろうが、ヤクザだろうが関係なく喧嘩してたな」

そうして中学三年の春休み、事件が起こった。

いつものように、必要ない喧嘩を買ってボロボロになるまで拳を振るっていた縁サンに、ナイフが襲ったんだ。

避けきれずに受けた刃は、場所が首元だっただけに大惨事となった。

「記憶はないんだが、ゴロツキの屍がゴロゴロ転がってるなかで、血まみれで笑ってたってさ」

面白い話だろ？と同意を求められても、笑えるワケないじゃないか。

「そのときの傷痕がコレ」

縁サンたグイッとタートルを下げると、思わずうっとうしくそんなくらいに引き攣った痕が現れた。

あと何ミリかで即死だったというその傷痕は、縁サンの肌が白くて滑らかなだけに男の勲章だというには慘く映る。

「…なんで綱紀が泣くんだ」

「え…」

グイッと拳で目元を拭うと、手の甲が濡れていた。

「どうして…？」

一度気づいてしまえば、ぱたぱたと涙が零れ落ちるのを止められない。

おかしいな、泣き虫じゃないはずなのに。

「それは、俺が聞きたい」

拭っても拭っても止まらない涙を手では受けきれなくなったオレを、縁サンは抱き寄せることで自分の肩で受け止めてくれた。

いまはただ、あたたかいこのひとがこうして生きていてくれたことが嬉しかった。

第十週：トラウマ（後書き）

あくまで架空の物語ですので、実際の事件・事故とは一切関係ございません…。

第十一週：手取り指取り

散々縁サンの肩で泣いて赤く腫れた目で、オレはゲームに熱中していた。

「あゝ！また負けた！！」

思わずコントローラーを放り投げそうになって、慌てて両手であわあ受け止めた。

縁サンの部屋のクローゼットには、びっしりとゲームやDVDが並んでいて、そのなかから小遣いが足りなくて買えなかった格ゲーをやらせてもらっている。

しかも対戦相手はJYOだし！

…しかし、全く勝てねえ…。

やり込んではいないけど、前作はやってるし千加の家でもやったことのあるゲームなのにさ。

これで本気で強いと思ってた自分にへこむ…。

「まあ、このくらいじゃまだ俺には勝てないな」

「自分で自覚があるだけにム力つくーっ！」

オレが頭を抱えて唸ると、縁サンは笑いながら（つか笑いすぎ）コントローラーを持つオレの手を上から握った。

ふいに触れたぬくもりに、体が思わずびくんと跳ね上がって、縁サンがブツと吹き出した。

「そんなに期待されると、こっちも照れるんだけど」

「してないっての！」

…まあ、さっき舐められたのが一瞬脳裏をよぎったのは否定できないけど…。

あーくそっ！赤くなるな自分っ！！

縁サンはヒーヒー言いながら（まったく失礼だ）、コントローラーの上にあるオレの指先をスツと移動させた。

「指先と腹を使って、こう移動させるともつとスムーズに出るぜ」

手取り指取りの必殺技発動レクチャーは、たしかに言われたとおりにやるとずっと早くできる。

なるほどなあ、指先には自信あったけどやっぱ頭と指は使いようってか。

縁サンはゲーセンでも効率的なやりかたを伝授してくれると言ってくれた。

優秀なセンセイがしてくれるならもっと勝率を上げられそうだな。って、オレの上にはそのセンセイしかないんだけどさ。

「ライバルに塩を送っていいんですか？」

「この実力じゃあな、ライバルとは言えねえだろ」

「あー、すみませんねえ！一度も勝てなくて！」

オレにレクチャーしたことを悔やむがいい！と挑んだ次の対戦もあっけなく敗れた…。

もついい、（今日は！）勝てそうもない…。修行あるのみだな。しかも縁サンは練習してこいとソフトを貸してくれる始末。情けない…。

「じゃあ、これも貸して」

ついでに、とこれまた発売したばかりのRPGを指さすと、クリアしたと言っていたのに縁サンはダメだと言う。

コンプリしてないのかな？いや、彼の腕だと一週間もあれば楽勝だと思うけど。もしかしてRPGは専門外？でも、だったらクリアなんて彼なら言わないだろう。

「貸すのは一回につき一本。でなきゃ、綱紀に会う機会が減るだろ」

「…は？」

「こうやって話せるのは綱紀だけなんだ。だから、しばらく会えないとまた鬱憤が溜まる」

ああ、そういうことか。…ん？なんかいま、なにかに引っかかったような…ちよつと残念と思ったんだけど…ってなにが？

でも、遊びたかったら呼んでくれればいつでも行くのに。家だって近所なんだからさ。

ということ、赤外線通信でケータイの情報交換をしながら、

「縁サンって、学校は…」

と思わず口走ったことにはなった。

引きこもってるって言ってるんだから、行ってるわけないだろ！
しまった、と途中で口をつぐんだオレに、縁サンは特別気にした
ふうもなく答えてくれた。

「ああ、もうそろそろ行けるかもしれない。綱紀に会ってから、
んだか調子がいいんだ」

縁サンはそう面映いことを言ってくれたけど、それはいままです
と独りで家にいたから心労が溜まっていただけだと思う。

家族と食卓を囲む時間もなくて、なにも相談できなくて閉じこも
っていたら、健康なひとだってストレスが溜まるさ。

オレしか話し相手がいないなんてさみしいコト言わないで、学校
行って友達をつくれればいいんだ。

帰る間際、縁サンはベランダからひとつの鉢植えを持ってきて、
オレにくれた。

小さな白い花をつけたそれは、植物に疎いオレでも見たことがあ
る。

「いちご？」

「そう。ワイルドストロベリー。実をつけると幸せになれるってヤ
ツ。まあ、最初から綱紀が育ててたわけじゃねえから、幸せになれ
るかは不明だけどな」

「ふうん、そんなもんなんだ」

小さくて可愛くて綱紀にそっくりだろ、なんて失礼なコトを言っ
てくれたが、そう笑った笑顔がベランダの『彼女』そのもので、う
っかりドキドキしてしまった。

「なら、縁サンが持ってたほうがいいんじゃない」

「俺のは別にあるから。それはベランダで初めて綱紀を見たときに
ウチにきたヤツなんだ」

ベランダにある花々は、滅多に帰宅しない両親が縁サンの心の慰めのために一定の間隔で送ってくれているものなんだそうだ。

最初はこんなものと放置していたそうだけど、そうすると萎れていくそれらを自分のように思えて育て始めた。

愛でただぶんだけきれいな花を咲かせてくれるのが、いつのまにか嬉しくなっていたんだ。

そういうところ可愛いなあ、なんて言ったらいろいろ倍返しされそうだから、口が裂けても言えないけど。

速攻で縁サンが右上がり気味の字で書いた『育て方』の紙を受け取って、玄関まで見送りにきた彼を振り返った。

「いちご、大事に育てるよ。また遊びにきてもいい？」

「ああ、いつでも」

はにかんだように微笑む縁サンに、勝つまではしつこく通ってやる！と心に決め、オレはビニール袋に入った鉢植えを片手に、上機嫌でスキップしながら帰宅した。

エピソード

「あれ？いない」

昨日に引き続き好天に恵まれたいつもの時間、ベランダには縁サンの姿がなかった。

正体がバレたんだから、前の時間に戻してもいいだろうに、まだ六時四十五分（細かい）に出てるのかな。

「まあ、今度はいつでも会えるんだし…いつか」

でもちよつとガツカリ。あの笑顔をみると元氣が出るのにな。一種の清涼剤？たとえ男だろうが美人は目の保養になるのさ。

自分の席で朝食をとっていると、猫かぶり優等生の千加がクラスの野郎どもに愛想笑顔を振りまいてやってきた。

あれ？いつもはもつと早くくるのに珍しい。

「はよ。今日は遅いな」

「まあね。一年の世話をしに呼びつけられた」

千加はまだきていないオレの前の席の椅子に座ると、弁当箱からエビフライを摘まんでオレに差し出してきた。

千加はエビフライを齧るオレを見ているようだけど、考えごとをしているときの目をしている。

なんか様子がおかしい？だつてほら、指を齧っても上の空だ。

今頃一年つて転校生の世話役でも押しつけられたのか？

いまの生徒会長はちよつと天然の入った面白いひとだけど、のりくらりと生徒会業務をサボって、副会長の千加に押し付けてるらしい。

今度の生徒会選じゃあ、生徒会長に抜擢されるともつぱらの噂の優等生は、先生からの信頼も厚い。

…みんな見事にだまされてる…。

「なに、転校生でも入ったのか？」

「いや…ん、まあ似てるけど」

なにその微妙な返答は。千加らしくもない。

首をかしげていると、教室の入口がザワザワし始めた。

千加の様子が気になりつつも入口に視線をやると、そのザワザワの原因と目が合った。

「！？」

千加の指ごと銜えていたエビフライのシッポがぼろりと机に落ちた。

羨望の眼差しでクラスメイトから見上げられる長身で美貌の主は、一年の象徴たる濃緑（二年は濃紺）のネクタイをダラリと締めてオレの席に歩いてきた。

「はよ、綱紀。今日はベランダで会えなくてゴメンな」

「ゆ、縁サン…？」

ついどもってしまったオレを縁サンは面白げに眺めている。

向かいでは千加が大きなため息をついていた。

てつきり大学生だと思い込んでいた彼は、なんと高校生だったのです。

ってゆーか、昨日『綱紀に会う機会が減る』とかなんとか言ってますでしたか？

そろそろ学校行けるかもって、今日かよ！？

しかも…

「一年！？」

叫んだことにより飛び散った飯粒を、これまたオカンな千加がせつせとティッシュで取る。

縁サンに飛んだものも『ゴメンね』などと声をかけて取ろうとしたが、縁サンはにこやかに『おかまいなく』と辞退した。

…ん？なんか二人の間に奇妙な雰囲気か…？

「ああ…コレ？本当は同じ二年のハズだったんだが、休学しすぎて出席日数が足りなくてさ」

器用な指先でネクタイを摘まんであつけらかんと云つてのけた彼は、高校に受かったあとだったからと襟元から覗く傷痕を示す。

それを見てつい傷痕の話を思い出して、涙ぐみそうになったオレの頬に縁サンは唇を寄せると、なななんと！ちゅっと吸い上げたんだ。

「っ！？ゆ、な、こ…っ」

訳（縁サン、なんちゅーコトをするんだっ）

「飯粒がついてたから、取っただけだぜ」

そう縁サンがウインクするとまたまたクラスに悲鳴が…。

マジすんません、コノヒトタチが変なんです！決してオレが美人好き…いや美人は好物ですけど！そんな気があるワケではなく（たぶん…え？）ってですね…。

「とりあえず、まずは友達からということだ」

…は？まずは？友達、から？って、なんでオレじゃなくて千加を見て言うんだ？

しかもなんか千加の目が座って…るような気が、するような…じやなくて座ってる！？

千加、まだゲーセンの件で縁サンを恨んでいるんだろうか。

「上條くん、一年の教室は遠いからもう戻ったほうがいいよ」

だってほら、表情はやわらかい微笑みを浮かべてるけど、目が笑ってないし。

どんなに機嫌悪くても、やさしい笑顔が得意の千加らしくない。

「そうですね、鈴木先輩。ああ、でも迷ったら困るから綱紀先輩に案内してもらおうかな」

…縁サンに先輩言われると嫌味に聞こえるのは、彼のほうがずっと大人びてるのを内心ひがんでいるからですか…。しかもこういうワケか先輩を強調してるし。

縁サンの言葉に千加がガタンと音を立てて立ち上がる。その音にクラス中の人間がビクツと震えた。

もうほとんど夏だったのに、教室に絶対零度の冷気が吹いた気が

…。現にクラスメイトも凍りついてるし。

「大丈夫、案内なら副会長のおれがするから」

「そうですか？重ね重ねすみません、お世話になります」

そんな冷気を縁サンは感じてないのか、ふわりと優雅な仕草で千加に頭を下げる。

そして連れ添って教室を出たと思ったら、縁サンがひょっこり頭を覗かせて言った。

「綱紀先輩、朝迎えにきて？一緒に登校しようぜ」

「あ、え、うん」

…。あ、いかん。頬が熱くなる…。

大好きな笑顔でおねだりする彼に逆らえるワケがないオレの返事に、『上條くん！』と千加の鋭い声に呼ばれた彼はウインクを投げに行ってしまった。

「おい、行くぞー！」

ベランダに向かつて叫ぶと、花の水やりに勤しんでいた縁（いまは呼び捨て）が振り向いた。

その顔にはいまだに見惚れてしまう笑顔。

美人は三日で飽きるだなんて、誰が言ったんだろうなあ。

しかし身にまとっているのは、オレが着てるのと同じ学校の制服

（しかも男子用）…だ。

現実ってキビシイ…（遠い目）。

「ああ、いま行く」

そうして、オレの日課は晴れた日にベランダを見上げることから、そのベランダの君を毎朝迎えに行くことに変わったのだった。

目下のオレの悩みは親友ふたりの間柄だ。

…。縁と千加…どうにか仲良くならないもんかな…。

鈍いと言われるオレから見ても、ふたりの間にはブリザードが吹いている気がしてならない。

なにかあったのかと聞いても、ふたりともにっこり（表面上は）笑って、

「なんでもないよ」

とハモるし。そういうところはピッタリ合うんだよな。

一体、なんなんだよあいつら…。

そんなオレに嵐が訪れるのは、もう少し先の話だ。

エピローグ（後書き）

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

『こんなのBLと言えるかあああ！（ちやぶ台返し）』的な感想をお持ちの方、申し訳ございません…。

一応、あとふたりほど主役級のひとがいるので、その視点で『After Days』と称した、番外編を少し書く予定です。引き続きお付き合いいただける方がいらっしやいましたら、よろしく願います（BL色の度合は変わらないと思いますが…）。

それでは、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2315e/>

晴れた日はベランダで

2010年10月8日15時11分発行